



# 知床国立公園地域のたどった道

— シレットク・大地の果てから世界自然遺産へ —

中川 元

(なかがわ はじめ)  
斜里町立知床博物館 館長

はじめに

昨年(二〇〇三年)一月、日本政府はユネスコの世界遺産委員会事務局へ知床の世界自然遺産登録推薦書を提出した。これを受けて、現地調査と審査を担当する国際自然保護連合(IUCN)のデビット・シェパード保護地域部長が来日、七月二〇日から知床で現地調査を行った。現地調査は七日間に渡り、知床連山の縦走、船による沿岸部の調査、ヘリコプターによる空からの推薦地全体の調査などが行われた。また、各分野の専門家からの聞き取り調査、地元団体からの聞き取りや意見交換なども行われた。また、これに先立ち動植物や海洋、河川の専門家一六名からなる知床世界自然遺産候補地科学委員会が発足し、第一回の会合が七月八日に羅臼町で開かれた。科学委員会は科学的なデータに基づき推薦地域の管理に必要な助言を与える機関である。知床の現地調査を終えスイスのIUCN本部に戻ったシェパード部長から八月に環境省の小野寺自然環境局長宛に書簡が

届き、推薦地の海域部分と河川工作物物についてのコメントがあり回答を求められた。これに対して日本政府は回答をまとめ、海域については資源管理や産卵魚保護のための方策を厳しく行っていることや、多利用型統合的の海域管理計画を策定すること、河川ではサケマス遡上と産卵状況の調査を継続していることや、設置の必要な箇所には魚道などを設置する計画であること等を伝えた。IUCNはこの回答を検討した上で、知床の重要性は陸域と海域の構成要素の相互関係に支えられていることであると、二月に書簡を送り二項目について見解を求めてきた。それは海域管理計画策定の促進と規定の強化、及び推薦地の海域部分の拡張である。現在(二〇〇五年二月末時点)これに対して新たな方策の検討なされている最中である。推薦に関する資料の提出は三月末が期限であり、それまでに回答を提出し、世界遺産委員会の審査を待つことになる。現在一七七ある自然遺産のうち海域を含むものは二割も無い。このためI

UCNは海域の登録に強い関心を示している。この課題をクリアする事が登録の要件であることは言うまでもなく、知床の遺産登録は予断を許さない展開になっている。知床の海は漁業を行いながら資源を守る海域として期待されている。それは持続的漁業の視点からもプラスになるはずだ。いづれにせよ今年六月に南アフリカで開催される世界遺産委員会で登録の可否が決定される。このように現時点では登録の可否は全く流動的であるが、本稿では世界自然遺産候補になるまでの知床のたどった道を振り返ってみたい。自然遺産登録が実現した際の今後の具体的保護管理のあり方を考える上で、また不幸にも遺産登録が見送られた場合には今後の知床のあり方を考える上でも、知床の歴史を振り返ることは無駄ではないだろう。

アイヌ語でシレットク(大地の果てる所)と名付けられたこの地域には先史時代から人の営みがあり、明治以降は資源に恵まれた半島として開

拓の試みられた土地でもある。現在、世界自然遺産候補地となった知床半島の中央から先端部にかけてのエリア、知床国立公園に遠音別岳原生自然環境保全地域と知床森林生態系保護地域を加えたエリアの開拓と保護の歴史をたどってみたい。

この地域の歴史は大きく四つに区分することができる。第一期は縄文時代からアイヌ文化期まで、すなわち自然の恵み中で自然と共生した人間の時代。第二期は開拓の時代で近世の場所請負制度の開始から昭和三〇年代の終わりまで。第三期は開拓から保護地域への移行期で知床国立公園指定から知床国有林伐採問題まで。第四期は一九九〇年の森林生態系保護地域指定以降現在までの知床が保護区としての機能を整えた時代である。

## 第一期

知床半島は八六〇万年前に始まる第三紀の火山活動によってできた半島だ。数万年前から現在に続く第四紀の火山活動によって海別岳から知床岳に至る現在の山脈の形ができあがった。険しく美しい自然景観は火山活動によるものだ。そこには縄文早期（約八〇〇〇年前）から人の活動の跡が残されている。縄文時代を経て擦文時代と続くが、同時代にサハリンから渡ってきたオホーツク人は流水の海で鯨や海獣類を追っていた民族だ。知床岬の段丘上には数十の縦穴住居跡があるがここは縄文時代やオホーツク文化期のものと考えられている。続くアイヌ文化期、人々は自然と共生する文化を築き半島内に数多くのアイヌ地名を残した。現代の我々はアイヌ地名を解釈することで当時の自然の様子やアイヌ民族の生活を知ることができ。近世になり、和人の記録からシレット

コ（知床岬付近）やルシャ、ウトロなどにアイヌコタンがあったことがわかる。斜里に関する最も古い記録である「津軽一統誌」には寛文九年（一六六九年）のアイヌ民族の蜂起であるシャクシャインの乱にルシャから一〇〇人程、シレットから一〇〇人程のアイヌが参加したとの記述があり、このころはかなりの人口がこの地域にあったと考えられる。

## 第二期

知床半島の斜里側は寛政二年（一七九〇年）にシャリ場所が開設され和人の支配する地域となるが、安政三年（一八五六年）の松浦武四郎の記録「回浦日記」にはシレットに三戸一〇人とあり、この一〇〇年に満たない間のアイヌ集落の衰退ぶりが見られる。武四郎は「知床日誌」などに場所請負制のもとで非道な扱いを受け衰退するアイヌコタンの様子を憤りをもって記述している。そして知床硫黄山の噴火の記録も残した。当時シャリ場所を領地としていた会津藩により安政六年（一八五九）には硫黄採掘が行われている。会津藩の知床経営は幕末から明治維新までの一〇年足らずだが、ウトロとホロベツに番屋が、知床岬には通行家があったことが記録されている。会津藩からシャリ場所を請負っていた又十藤野による漁業は明治になっても続く。明治一二年の斜里郡の漁場は九箇所、うちウトロから先には鮭鱈の建網場がウトロ、ホロベツ、ルシャにあった。明治二九年には斜里郡の半島部（遠音別村）の漁業は一戸六人。海産物は鮭はルシャ、ホロベツが主で、オヒョウはイタシベウニなど、他にニシン、タラなど種類は多いが漁獲高はさほどでなかったとされる。

明治に入っても知床硫黄山の硫黄採掘は続く。明治一年皆月善六による鉱山経営が始まるが、明治一三年と二二年の硫黄噴出により硫黄採掘は絶頂期を迎え、皆月は北海道の硫黄主として名をはせる。硫黄山は昭和一年にも噴火し第二次硫黄採掘の時代になる。この時作られた運搬用ケープルの跡や海岸の硫黄流出防止柵の跡が今も残っており、硫黄山への登山道脇や、海岸では観光船から望める場所にこれらの産業遺跡が残っている。

漁業や鉱業に比べ農業開拓の歴史は浅い。イワウベツ（岩尾別）原野が植民地区画されたのは明治四三年、始めて開拓者が入ったのは大正三年のことである。羅白岳は最新で七〇〇年前の噴火活動が知られる活火山だ。その山麓の溶岩台地の上の岩尾別開拓地。地表には大小の岩が顔を出し地下水は深く伏流して井戸を掘ることもままならない。厳しい土地条件に加え、入植数年後に起きたバツタの大発生が追い打ちをかけ、大正一四年までには全戸がこの地を去った。昭和一二年に始まる二度目の入植もその多くは長続きすることはない。戦後緊急入植があり、岩尾別大地に三度目の開拓の鉄が入れた。しかし火山岩が堆積し交通の便も悪い奥地の開拓は戦前同様に困難を極めた。このころから未開の地知床が、豊かな自然環境の保存された半島として注目されてくる。昭和二八年には植物学者の館脇操博士らにより知床で初めての学術調査が行われ「網走道立公園・知床半島学術報告書」（一九五四年）にまとめられた。そして知床の景観と原始性が徐々に専門家や中央に知られてゆく。昭和三〇年代に何度も知床を訪れ

た作家の戸川幸夫は写真を多数使った「野生の旅・知床半島」（昭和三六年、新潮社）で知床の自然とそこに生きる人を紹介した。また、小説「オホーツク老人」とその映画化作品である「地の果てに生きるもの」で知床が全国に知られてゆく。知床の調査に来ていた学者らがメンバーになっていた国の自然公園審議会は昭和三六年、知床を国立公園に指定するよう答申する。「原始的な景観の保護のため速やかに国立公園に指定することが必要」とされ、地元の陳情もほとんどない中でこの答申だったことが特徴だ。

### 第三期・四期

昭和三九年、知床は南アルプスと共に我が国二番目の国立公園に指定される。一方、答申から国立公園指定までの間に知床林道と知床横断道路が着工する。昭和三七年に着工した知床林道はルシャマでの二三キロに及び、海に面した山肌を削っただけの道路は完成後も長く崩落を繰り返すことになる。また、沿線の森林資源や鉱物資源開発のための産業道路として計画され、昭和三八年に着工した開発道路宇登呂羅臼線（知床横断道路）は完成までの一八年間にわたり難工事が続けられることとなる。このように国立公園指定によって知床は始めて保護への道を歩み始めるが、しばらくの間は開発と保護が並行もしくはせめぎ合う関係が続くことになる。そうした中、岩尾別の開拓地は国立公園内に残された唯一の農地となる。戦後も困難を極めていた岩尾別の農業開拓は、昭和四一年最後に残った二四戸が市街地へ集団移転することに終息へと向かう。その離農した土地は不動産グループなどにねらわれるところとなる

が、知床を乱開発から守るためにスタートした知床百平方メートル運動により、土地の買い取りと植林が進められた

知床の保護区としての歩みは一九八〇年代に入って加速する。一九八〇年には遠音別岳周辺が原生自然環境保全地域に指定され、一九八二年には国立公園より一回り大きなエリアが国設知床鳥獣保護区となった。環境省によるシマフクロウの保護増殖事業も始まる。知床百平方メートル運動も全国展開を続け、運動参加者の子弟が知床で一週間の自然体験をする知床自然教室も一九八〇年にスタートする。一九八六年から翌年春にわたった知床国有林伐採問題は保護と開発をめぐる知床最後の衝突となった。この知床国有林問題や白神国有林の問題を契機に林野庁は森林管理のありかたを大きく転換する。その具体的な形として新しい保護林制度である「森林生態系保護地域」が生まれた。

一九九〇年知床は白神、屋久島などと共にこの森林生態系保護地域に指定される。国立公園、鳥獣保護区、森林生態系保護地域と、これら三つの保護区が重なり合い、原生自然環境保全地域を加えて知床は我が国でも最も保護の進んだ国立公園となった。ソフト面ではヒグマと人との接触の回避策など野生生物との共存を図るべく日々の調査結果に基づいた保護管理策が行われている。

### おわりに

今回の世界自然遺産への推薦は知床の歴史上一つの節目になることは間違いない。推薦に至る様々な作業の中で住民と行政、専門家らによるいくつもの会議が開かれ議論が続けられた。IUCN

Nからの二度目の書簡を前にして、この議論は今もまだ続いている。五〇年前、いや三〇年前でさえ今の知床の姿、この状況を想像することは難しかっただろう。三〇年後、五〇年後に今の我々の想像を超えた自然と人の調和した「世界の宝」が存在していることを願いたい。

### 参考文献

秋葉実解説（一九九四）松浦武四郎知床紀行集。

九七頁 斜里町立知床博物館協力会

斜里町史編纂委員会（一九五五）斜里町史。九三

九頁 斜里町役場

斜里町史編纂委員会（一九七〇）斜里町史第二巻。

一〇五三頁 斜里町役場

斜里町史第三巻編纂委員会（二〇〇四）斜里町史

第三巻。一二四二頁 斜里町

斜里漁業史編纂委員会（一九七九）斜里漁業史。

七八六頁 斜里漁業史編纂委員会

俵浩三（一九七九）北海道の自然保護。三〇八頁

北海道大学図書刊行会。札幌

中川元（一九八五）知床をめぐる自然保護と開発

の歴史。知床半島―自然と生き物たち。頁四四

―四五 人と自然の会。東京

羅臼町史編纂委員会（一九七〇）羅臼町史。八五

九頁 羅臼町

羅臼町百年史編纂委員会（二〇〇一）羅臼町百年

史。一八三二頁 羅臼町

# 年表 知床国立公園地域の歴史

約八〇〇年前

縄文時代早期の遺跡（幌別川口遺跡）

縄文〜統縄文時代を経て擦文時代（〜二世紀）へ

オホツク文化期が並立

アイヌ文化期

最も新しい羅臼岳の噴火活動

シヤクシャインの乱にルシヤと知床岬のアイヌが参加

（文献上最初の知床に関する記述）

寛政蝦夷の乱（国後・目梨の乱）に目梨領（羅臼）のアイヌが参

加

シヤリ場所分設

松浦武四郎初めて斜里・知床岬間を往復（再航蝦夷日誌）

松浦武四郎羅臼から半島を一周し斜里へ（戊午第二巻）

「知床日誌」にはアイヌ集落の状況や硫黄山噴火を記述

会津藩による硫黄採掘事業

（安政六年〜慶応三年）

開拓使の雇米人地質学者ライマンが知床硫黄山を調査

皆月善六による硫黄採掘始まる（明治三六年まで継続）

知床硫黄山噴火 明治二二、二三、二八年にも硫黄噴出

岩尾別原野が植民地区画される

岩尾別に最初の開拓者入植。その後集団入植で開拓者増加するが、

バツタの大発生（大正八年頃）などにより、大正一四年（一九一

五年）までに全戸が退去

知床硫黄山噴火・硫黄噴出（昭和一五年まで硫黄採掘）

岩尾別に再度入植はじまる

戦後緊急開拓政策による岩尾別入植

知床半島初の学術調査が館脇操、犬飼哲夫氏らにより実施される

斜里ウトロ間の道路開通

作家戸川幸夫が知床の自然や野生動物を紹介

国の自然公園審議会が知床の国立公園指定を答申

知床林道着工（一九六九年開通）

開発道路宇登呂羅臼線（知床横断道路）着工

知床岬に無人灯台完成

知床岬にロッジ建設計画。地元住民の反対などで中止。

知床国立公園指定（一九八四年、九五年に公園計画の改訂、保護

強化）

北海道教育委員会による知床半島特別調査実施される

岩尾別開拓地に残る最後の二戸が集団移転

一九六六年（昭和四一年）

知床国立公園羅臼管理官事務所開設されレンジャー一名配置される

一九七一年（昭和四六年）

「知床旅情」のヒットによる知床ブームで観光客増加

一九七二年（昭和四七年）

斜里町自然保護条例制定

一九七四年（昭和四九年）

斜里羅臼両町による「知床憲章」制定

同年

斜里町の自然保護団体「青い海と緑を守る会」（知床自然保護協会の前身）が発足

一九七七年（昭和五二年）

知床百平方メートル運動スタート

同年

知床岬地区（文吉湾）に避難港完成

一九七八年（昭和五三年）

知床博物館開館

一九七九年（昭和五四年）

北大山岳部が知床縦走中に遭難、三名死亡

一九七九〜八〇年

北海道による知床半島自然生態系総合調査実施

（昭和五四〜五五年）

知床横断道路開通

一九八〇年（昭和五五年）

第一回知床自然教室開催

同年

遠音別岳原生自然環境保全地域指定

一九八一年（昭和五六年）

地元と道内自然保護団体合同の知床横断道路事後調査実施

一九八二年（昭和五七年）

国設知床鳥獣保護区指定。斜里猟友会が春グマ駆除自粛

同年

シマフクロウ保護増殖事業開始

一九八三年（昭和五八年）

羅臼ビジターセンター開館

一九八四年（昭和五九年）

環境庁による遠音別岳原生自然環境保全地域調査実施

一九八六年（昭和六一年）

半島先端部のウイヌブリエ線で山火事発生

一九八七〜八七年

知床国有林伐採問題

（昭和六一〜六二年）

伐採反対派の午来昌前知床自然保護協会会長が斜里町長に当選

一九八七年（昭和六二年）

知床自然センター開設。自然トピアしれとこ管理財団（現・知床財団）設立

一九九〇年（平成二年）

知床森林生態系保護地域指定

同年

スノーモビル乗り入れ規制開始

一九九一年（平成三年）

国立公園内民有林の伐採計画不許可処分。後に道が民有林買上げ

一九九七年（平成九年）

知床百平方メートル運動募金目標達成、新運動へ

一九九九年（平成一一年）

五湖・カムイワッカ間の車両規制実施

二〇〇二年（平成一四年）

国指定知床鳥獣保護区の改訂（面積拡大、特別保護指定区域設定等）

二〇〇三年（平成一五年）

知床森林生態系保護地域の改訂（保存地域、保全利用地域共に拡大）

二〇〇四年（平成一六年）

ユネスコに知床の世界自然遺産登録を推薦